

第14回 IAGG Master Class on Ageing in Asia に参加して

安藤 悠哉

(日老医誌 2026 ; 63 : 254-255)

2026年5月22日から24日にかけて、フィリピン・マニラの St. Luke's Medical Center - Global City において開催された第14回 IAGG Master Class on Ageing in Asia に参加する機会を得た。報告者は平素、消化器内科医として診療および臨床研究に従事しているが、高齢患者の診療においては、臓器別の専門性のみでは対応し得ない複合的課題にしばしば遭遇する。本マスタークラスにおいてアジア諸国の若手医師・研究者とともに老年医学を学修し、議論を交わし得たことは、極めて意義深い経験となった。

本マスタークラスでは、講義、症例検討、研究発表およびグループディスカッションを通じて、フレイル、認知機能、ポリファーマシー、慢性疾患管理、ならびに社会的背景を考慮した高齢者総合機能評価 (Comprehensive Geriatric Assessment) など、多面的観点から高齢者医療に関する議論が展開された。とりわけ示唆に富んだのは、「高齢化」という共通課題に対峙しながらも、医療資源、家族構造、社会保障制度、文化的背景の相違によって、各国の問題意識および対応策が大きく異なる点である。他方で、高齢者の尊厳を保持し、その人らしい生活を支援するという理念は各国に通底しており、老年医学が国境を越えて共有される学問領域であることを改めて実感した。

報告者は「Association between Internet Use and Annual Health Checkups among Older Japanese Adults」と題し、本邦の高齢者におけるインターネット利用と健康診断受診との関連について口頭発表を行った。参加者からは、デジタルデバイド、予防医療へのアクセシビリティ、ならびに各国の健診制度の差異等について、多岐にわたる質問および建設的なコメントが寄せられた。自身の研究をアジアという地域的文脈に位置づけ直す過程



終了後に台湾の Li 先生と

を通じて、本邦のデータに基づく研究であっても、国際比較研究や政策提言へと展開し得る可能性を有することを学んだ。

加えて、マニラ滞在を通じて、急速な発展を遂げる都市の活力と、地域間における医療・生活環境の多様性を实地に観察する機会を得た。休憩時間や会食の場における非公式な対話からも、各国の医療提供体制やキャリア形成のあり方について多くの知見を得ることができた。

本研修への参加を通じて、自身の専門領域に閉じることなく、高齢者を全人的に診療する視座の重要性を改めて認識するに至った。今後は、消化器疾患を有する高齢者の診療および臨床研究においても老年医学的視点を積極的に導入し、本マスタークラスで構築されたアジア諸国の研究者ネットワークを基盤としつつ、高齢者医療の質的向上に寄与していきたいと考える。末筆ながら、このような貴重な研鑽の機会を賜った日本老年医学会、IAGG 関係各位、現地運営にご尽力された先生方、そして不在の期間中、診療業務を支えてくださった防衛医科

大学校病院消化器内科の諸先生方に、心より深謝申し上げる次第である。
